

借りたはずの自転車

「ちょっとたかし、いつまでねているの。じゅくのテストにおくれるわよ。」

母の声で、ぼくは目を覚ました。時計を見ると、もう八時半だった。目覚ましはセツトしたが、ねぼけて止めてしまったらしい。ぼくは急いで着がえ、支たくをすませた。このままだと、じゅくのテストにち刻こくをしてしまう。昨日おそくまで勉強していたことを後かいしながら、朝ご飯を食べないで家を飛び出した。

会場までは、バスで駅まで行つて、電車で二駅乗らなければならない。バス停まで全力で走った。バスの時刻表じこくを確かめると、今さっき出たばかりだった。次のバスまでしばらく時間がある。

このままだとまにあわない。家に引き返して自転車を取りに行く時間もない。あわてたぼくは、この近くのマンションに住む親友のゆうすけの自転車のことを思い出した。ゆうすけは最近新しい自転車を買った。ぼくの自転車より一回り大きく、スピードメーターまでついている。

「いいなあ、ゆうすけの自転車。」

とぼくが言うと、

「たかしなら、いつでも自転車乗っていいよ。親友だからね。」



と、ゆうすけは言ってくれた。

ゆうすけとは幼なじみで、よく遊んでいる。おたがいの自転車のカギの番号も知っている。ぼくはゆうすけのマンションへ急いだ。自転車置き場へ着くと、いつもの場所にゆうすけの自転車がとめてあった。ゆうすけの家はマンションの最上階だ。「自転車、借りてもいいかな。」と、ゆうすけに声をかけようと思ったが、そんな余ゆうはない。ぼくは迷った。しかし、テストは午前中で終わるし、後できちんと借りたことを言えばだいじょうぶだろう。なによりゆうすけとは大親友だ。ぼくはそう思い、ゆうすけの自転車に乗って駅へと急いだ。おかげでテストにはギリギリまにあった。

ゆうすけは今日、父親と駅前の広場で行われるフリーマーケットのイベントに出かける予定だった。朝食をすませ、フリーマーケットに出品する物をまとめ、自転車置き場へ下りた。いつもとめている場所に向かうと、自転車がない。辺りを見回しても見当たらない。そんなゆうすけのすがたを見てゆうすけのお父さんが、
「ゆうすけ、どうした。」

と声をかけた。自転車がないことを伝え、父親と自転車をさがすことになった。周りのマンションの自転車置き場もさがしたが見当たらない。



「ぬすまれたかもしれないなあ。しっかりとカギはかけたのか。」
とゆうすけのお父さんが言った。

「ちゃんとかけたよ。」

確かに昨日、しっかりと自転車のカギをかけた記おくがある。しばらく二人でさがしたが見当たらない。

「しかたない、とりあえず歩いていこう。自転車のことは駅前の交番で相談してみよう。」
ゆうすけのお父さんは言った。

大きな荷物をかかえて駅に向かって歩いているとちゅう、たかしのお母さんが車で通りかかった。

「あら、ゆうすけ君。フリーマーケットに行くの？ これからたかしをおかえに行くと
ころなんだけど、よかったら駅前まで乗っていく？」

と声をかけてくれた。

ゆうすけの様子がいつもとちがうことに気づいたたかしのお母さんは、

「どうしたの。なんだか元気がないわねえ。」

と声をかけた。たかしのお母さんは車の中で、ゆうすけの自転車がなくなったことを知った。

「そこまでさがしてないのなら、新しい自転車だし、ぬすまれてしまった可能性かのうせいもある
わね。早く見つかるといいんだけど……。」



「駅前の交番で相談をして、場合によってはどう難^{なん}届けを出さないといけないな。」
とゆうすけのお父さんは言った。

たかしのお母さんは二人を駅前広場で降^おろし、試験会場へ向かった。

試験が終わり、会場の前で待っていると、母が車でおかえに来了。

「どうだったの、テスト。まにあったの。」

と車の中で母がたずねた。

「それが、走って行ったんだけどなかなかバスが来なくて……。あつ。お母さん、駅に寄^よってくれる。」

ぼくは、ゆうすけの自転車を借りたことを思い出した。

「あら、どうして。」

と母が聞くので、会場にまにあったいきさつを話した。

ぼくが話し終わると、母は近くに車をとめた。表情^{ひようじよう}がとても険^{けわ}しい。

「たかし、さっきゆうすけ君とゆうすけ君のお父さんに会ったけど、必死で自転車をさがしていたのよ。結局見つからなくて、ぬすまれたかもしれないって。」

ぼくは母から事情^{じじよう}を聞き、ゆうすけの顔を思いうかべた。

(長島 寛和 作)

